
使い捨ての英雄

竜騎士そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い捨ての英雄

【Nコード】

N5727Q

【作者名】

竜騎士そらら

【あらすじ】

神討伐の命を受け、その住まうとされる島へ向かう零二とその仲間たち。しかしその途中で神から攻撃を受け、戦力の大半を喪失することになる。なおも続く神の攻撃から逃れながら、零二は目的を果たそうとするが……。 クリムゾン・ブルーシリーズ、七月零二編。

序

今にも沈まんとする太陽が空を真っ赤に染め上げる。漆黒のカラスが赤い空を一直線に切り裂く。そんな風景に背を向け、少年はうなだれとぼとぼと歩く。カラスの鳴き声にバカにされているように感じて、気持ちちはますますみじめになる。

世の中は理不尽だ。理屈で動くものならば、なるほど、実にわかりやすいものだ。しかし不幸なことに、人の世は理屈だけで動いているわけではないようだ。多く感情というものが作用している。それも愛だの恩だの美しい感情ではない。欲望と恐怖だ。

学校の授業では教えてくれない世界の仕組みはしばしば誰かに牙をむく。その攻撃はほとんどが弱者に向けられ、標的には身構える時間すら用意されない。いや、それどころか牙で身を引き裂かれて、いることすら気付かせてはくれない。いつの間にか周りには完全を取り囲まれ、逃げ道を失う。これが人の世という名の、恐ろしい化物なのだ。

ああ、今日の出来事を思い起こすだけで気が滅入る。こんな世界もういやだ……………

ふと、視線を感じた。誰だろう？ 周囲に視線を巡らせ、みつけた。小さな公園のベンチに、人が座っている。それがこちらに視線を向けている……らしい。「らしい」というのは、その人間が本当にこつちを見ているのかの判断がつきにくいと感ずることによる。その人間は奇妙な形の仮面をかぶり、顔を隠していた。仮面は真紅であり、そして片側の頬の位置に穴が開いている。穴の中は真っ暗であり向こう側を見ることがかなわない。これでは、視線の行く先を正確に知ることはできない。

少年はその姿に恐怖すら覚えた。そうだろう。明らかにまともな

類の人ではない。できるなら関わらない方がいい。いますぐ背を向け立ち去るのがいい。しかしそれができなかった。恐怖で足が動かなかった。

「よう、少年。どうした？ なにか思いつめているようだな？」

若い男の声。重々しさや厳格さとは無縁な印象を受けた。この声は恐怖心を煽るものではない。仮面とのギャップに違和感を覚える。「どうした？ なにか返事してくれないか？」

気がつけば無言で見つめ合っていた。とはいえ、なんと言えいいのだ？

「まったく。最近のガキはなんでか愛想が悪い。まあいい。大方、学校でいじめられたことを根に持ってるんだろ？ それで、友達も先生もあてにならない。生きるって辛えもんだな」

どうして知ってるの？ 驚いて聞いてしまった。

「うん？ それはだな……………」

男はくつくと笑いながら、冗談っぽく返答した。

「俺が、魔法使いだからさ。魔法使いは人の心なんて簡単に読めるからな」

なにいつてるの？ 魔法使いってなにさ？ 頭大丈夫？

「おいおい。それが初対面の大人に対して聞く口か？ 黙ってるかと思えば、開いたら口悪いな……………まあいい。お前みたいなガキが悩むなんて、学校で友達とうまくやっていけないとか、その程度だろう？」

そう言われればそうかもしれない。

「なあ。お前は、友達ってどういうもんだと思ってる？」

だしぬけにそう訊いてきた。どういうことだろう？

「つまりだ、お前の学校の友達は、お前にとってどういう存在なんだ？ 信頼に値するとか、他にはありえない宝物だとか」

そんなのありえない。少年は思わずそう叫んでしまった。友なんてものは醜いだけだ。都合のいい時は味方面して、なにか不都合が出てくると急に手の平を返す。人間、そんなのばっかりだ。

「おやおや、ずいぶんとひねくれた答えだ。よつぱど君の周りの人間はろくでなしばかりのようだな」

そう。というか、美しい友情なんてものがあるなんて信じられない。あり得ない。

「そんなことないぞ。世の中には友達思いの奴はいくらでもいる」
嘘だ。

「うそじゃないさ……そうだな。ちよつとこつちへ来てくれ。おもしろいお話をしてやろう。友達を大事にする、ひとりの……そうだな。英雄の話だ」

さつき感じた恐怖はどこへやら。こつちへ来いという言葉に素直に従ってしまった。この男が意外に話しやすいからか。それに、話というのが少しだけ気になった。男の隣に座った。

「よし。良い子だ。……さて、どこから話そうか………」

第一話

「敵襲ー！ 敵襲だー！ 総員戦闘配備ー！」

風と波に翻弄され揺れる船の中を、伝令が駆け回る。まだ目的地にはついてないのに、なにがあつたのだろう？ 七月零二は武器をもつて部屋から出た。他の部屋からも、何事かとぞろぞろ人が出てくる。誰ひとり事態を把握していない。さっきまで、ただの嵐に揺られていたのに。

いや、余計な事を考えてる暇はない。零二は他の仲間たちと共に甲板へと上がった。

暗雲立ち込める空を、ジグザグの稲妻が切り裂いた。雷鳴が耳をつんざく。横殴りの雨が体を打つ。立っているのも難しいほどだ。ひとときわ高い波が甲板をさらい、先行していた何人かが海に投げ出された。

「くそ！ 敵は！？」

甲板に出、目を凝らす。いた。こちらの船の真正面。前方に別の船が見えた。大きさもこちらと同じぐらいか。このままではぶつかると同時に出来た仲間も同じことを考えているようで、危ないだとか操縦士は何をしているだとか口々に叫んでいる。そうしている間にも、船は互いに接近してくる。どちらも進路を変えようとはしない。

そして、相手の船の上にうごめく影がいくつも見えた。

「っ！ 戦闘準備だ！ 来るぞ！」

誰かが叫び、それに応じて各々が甲板上に散開、武器を構える。銃や刃物。人によっては魔道書など。零二も刀を鞘から抜いた。そして衝突。波の物ではない衝撃が船を揺らし、舳先が粉々に砕ける。

互いの船はなおも前進を続け、木がバキバキと音を鳴らす。破片が海へ飲み込まれていく。向こうでうごめいていた影が、こちらの船に乗り移ってくる。誰かが攻撃開始と叫んだ。銃弾が影に撃ち込まれる。相手はひるんだ様子を見せない。銃弾では効果がないと悟った兵が、武器を持って影へと接近。先陣を切った味方が影に剣を振りおろそうとして……

「ゴオオオオオオオオ！」

影がその兵の体を持ち上げ、頭上高くに掲げた。そして足と胴をそれぞれ持ち、力を入れて引きちぎった。哀れな兵士は真っ二つになり、血と臓物がバシャバシャと影と甲板に降りそそいだ。その光景にひるんでいる隙に、接近された別の兵が犠牲になった。頭部をわしづかみにされ、握り潰された。頭だった物はトマトのように飛び散り、首から上を喪失した体が膝をついて倒れた。なおも敵は前進するが、こちらは恐怖に気押されじりじりと後ずさっている。

「まずいぞ……」

「魔法を使える物は、前へ！ それ以外の者はさがって援護だ！」

その声を聞き零二は、はっとして前線へ躍り出た。近づいてわかった。影に見えるのは、その姿が本当に真っ黒だったからだ。光を全く反射しない体表に、ずんぐりとしたシルエット。こんな生物見たことがない。

影がこちらに拳を振り下ろす。自分の刀の切っ先にまで魔力を集中させてその拳を一闪。刃が触れると同時に、敵の体は砂の風に吹かれるように掻き消えた。なるほど。この敵は魔力の塊でできているようだ。

「零二！ 遅れるんじゃないぞ！」

零二の脇をひとりの男が駆け抜けた。右腕に鎖を巻き付け、片目を包帯で隠した異様な姿の男。彼が敵を殴ると、敵は姿勢を崩した。衝撃波がこちらまで伝わってくるほどの強力なパンチ。

「ちいっ！ 一撃じゃ殺せないか！ 零二！ それどうやるんだ！？」

「知るか生まれつきだ！」

魔法を使った攻撃は有効のようで、今度は敵が少しずつ後退している。中でも零二の活躍は目覚ましく、触れただけで敵を消し去ってしまう。運良く敵との相性が合ったためだが、武器を持たず素手でしか戦わない敵にとつて、零二の存在は驚異のはずだ。刀を振り回し、周りの敵みな倒していく。今この状況で彼は無敵であり、戦闘の中心であつた。敵の群れに零二が穴を開け、その穴を仲間の魔法使いが広げる。いいぞ。このまま戦線を相手の船まで押し戻して

.....

———！

「！？」

背後で断末魔のような悲鳴が聞こえた。誰かやられたのかと振り返ると、なにかが飛んできた。咄嗟にはたき落とす。甲板に落ちたそれを見る。人間の頭部だつた。

「.....」

船が揺れ、頭部が転がる。一瞬目が合った。そのまま視線を上げるのがためらわれる。しかし下ばかりむいてるわけにもいくまい。前後両方から影が迫りくるのを感じ、零二はきつと前を見た。

後方には、魔法使いの援護を指示された一般の兵士たちがいるはずだ。しかしその姿が見えない。かわりにあるのは大量の敵と、甲板を染める鮮血。考えたくないが、彼らは.....

怒りがふつふつと沸き上がるのを止めることはできなかった。奴ら全員を消し去るべく敵の群れに突進し、最初に目についたのに手を伸ばそうとして、できなかった。

轟音、衝撃。直後、船が割れた。何があつたのかわからないまま揺れにもてあそばれ、海に投げ出される。海面に体がたたきつけられ痛みが体中を駆け巡るが、なんとか意識を保てた。手近にあつた船だった木片にしがみつき頭上を見上げる。さっきまで自分のいた船が真つ二つに割れ、そこにいた者は皆敵味方の区別なしに海へと

吞まれていった。敵の船は？ 見ると、状況は同じようだった。あちこちから黒煙が噴きあがり爆発が起き、沈み始めていた。いや、それはおかしい。あの爆発は誰の手によるものなんだ？

大きな波に吞まれ海中に沈む。木片から手を離してしまった。一瞬にして海面ははるか頭上へ。死体と船の残骸の浮かぶ場所へ手を伸ばすが届かず、足をばたつかせるがうまくいかない。体が酸素を求めてくるが、零二にはどうしようもなかった。次第に意識が遠のいていくのを自覚しつつ、死を覚悟した……………

第二話

零二が目を覚ますと、天井の木目が目に入った。ここは船の中の自分の自分の部屋で、自分は寝ていてさっきのは夢だったのかと一瞬思う。しかしすぐに違うと認識した。ここは波に揺られていないし、空気もカビ臭くない。妙に居心地がいい。ここはどこなんだ？ さっきのが夢でなかったにしても、横になっていたのは事実だ。起き上がると、かかっていた布団がぱさりと落ちた。同時に、体中があちこち痛んだ。死後も痛みを感じるものなのだろうか？ 幸い、動いたりするのに支障はない。痛みをこらえつつ立ちあがり、辺りを見回す。木造建築。しかし、見慣れた船の中や普通の民家とは明らかに違う。なんというか、そう。空間のとり方が贅沢だ。広い部屋の本真中に布団が敷いてあるという状況。

障子が目に付いた。再び周りを見ても誰もいない。少し躊躇したが、開く。瞬間、温かい日差しが降り注いだ。視界に小さな庭園が入る。小さいが美しい。しばしその光景に見とれていると、どこから歌声が聞こえてきた。その、乙女の澄んだ歌声は耳に心地よく美しかった。声の主はどこだときよるきよる。声がだんだん近づいているのはわかった。そして見つけた。縁側の曲がり角を曲がってこちらに向かってくる少女。白い小袖に緋色の袴を着ている。巫女か。彼女が歌を口ずさんでいるようだ。そして零二が彼女を見つめているのだから当然ながら、彼女も零二に気付いた。

一瞬、どうしたらいいのか互いに分からなくなる。ややあつて、少女が口を開く。

「よかった。お目ざめになられたんですね」

そう言った少女の笑みは、零二が今までに見た誰のものよりも美しかった。

朦朧とした意識の中、誰かに体を支えられているのはわかった。体中が重い。そして妙に寒い。そうか、海に投げ出されてずぶ濡れなのか。

「すまん。こういう時どうすればいいか、俺にはよくわからなくて」

これは誰の声だ？ 考えてる途中で、なにか固いものの上に下ろされた。ごつごつしていて湿っている。岩か。同じ感触が背中にもあった。しかたがない。壁面にもたれかかった。

「他にも何人が抱えて陸に上がったが、生きてたのはお前だけだった」

「あんたは……誰だい？」

誰かが話しかけてくるが、残念ながらこっちは頭がうまく働かない。かろつじてそれだけ言った。

「うん？ 俺か？ 俺は戦闘員として船に乗ってた。……アンリ・ラ・マユだ。お前は？」

「アンリ……悪いが少し静かにしてくれないか？ 少し眠りたい」

「あ……ああ。わかった」

その返事を待たずに体から力を抜く。意識が完全に遠のいた。

とりあえずさっきまで寝ていた部屋に入り、座って巫女さんと向かい合う。こういう時どうすればいいのか、零二にはさっぱりわからない。それは相手も同じようだった。なんとなく見つめ合うのも恥ずかしい。

いやいや、ずっと見つめ合ってるわけにもいくまい。

「あの」「あの……」

意を決して声を出すと、向こうも同時に何か言おうとした。うーむ。うまくいかない。

「えっと……そちらからどうぞ……」

巫女さんにそう言われてしまった。それじゃ遠慮なく。

「まず、ここはどこなんだ？」

「ここですか？ 神社です。七月神社」

「七月……ということとは、ここは七月島なのか？」

「え？ ……ええ。そうですよ……？」

巫女さんは不思議そうな表情を見せたが、零二はそれに気付かない。七月島。それは、零二達が船で向かっていた島の名前。攻撃を受けたが、目的地にはたどり着けたということだ。これ以上の状況はわからないから、目的が果たせるかどうかは不明だが。

「あの……ひとつ、いいですか？」

巫女さんが、少し気まずそうに言った。

「うん？ なんだ？」

「もうひとり、流されてきた人がいるんですけど、会いますか？」

なんだって？ 今なんて言った？

巫女さんに、別の部屋まで通された。さっきまでいた部屋と、構造はあまり変わらないか。女がひとり座っていた。零二が入ってきたのに気付いてこちらを向いたが、それ以外の動作が全くなかった。零二よりは少し年上か。なんとなく見覚えはあるが、名前も知らない人だ。巫女さんといえば、話の邪魔になると思ったのか既に退散している。

「えっと……討伐隊の人間か？」

まず知るべきはこのこと。相手もこの質問は予想していたらしく、答えはすぐにきた。

「ええ。そうよ。あなたも？」

「ああ。七月零二だ」

「わたしは、白河祈李」

「そうか。なあ、俺達以外で誰が無事な奴って……」

「わたしの知ってる限りじゃ、いない。わたしとあなたは海に投げ

出されて、海岸に打ち上げられた。それを笹川さんが見つけて、ここへ運ばれた」

「笹川さん？」

「この神社の巫女よ。笹川詩乃。あなたをこの部屋まで連れてきたでしょう？」

なるほど、あの巫女さんか。いい名前だ。いや、そんなことより、「なあ、俺達これからどうするべきなんだ？」

その問いに、祈李はすぐには答えなかった。

海岸沿いの崖下に、ぼつかりと穴が開いていた。これを洞窟というのかどうかはアンリにはわからなかったが、とりあえずの身の置き場にはもってこいだった。

自分達の乗っていた船が割れ、海に放り出された。なんとか海面まで浮かびあがり、辺りを見渡すと、目に入るのは死体ばかり。それが、波に翻弄され流されていく。とにかく陸に上がらないと。がむしゃらに水をかき、泳いだ。途中で何人が生きている人間を見つけた。それらをできるだけ多く掴んで抱いて連れていったが、なんとかこの洞窟までたどり着いた時にはひとりを除いて全員息絶えていた。ひとりだけ生きていたのは、白衣を着た女だった。名前は知らない。彼女も消耗が激しいのか、かれこれ数時間眠ったままだ。アンリはというと、その間にもすることがなかった。洞窟の入り口で海を眺め時間を過ごしていた。息絶えていた、かつて仲間だった人間は皆、ここに捨てた。死体はとうに流され、アンリの目の届かない場所へと消えた。仲間とはいえ、知らない人間ばかりだったし、知らぬ人間の死に対して大した感情は抱けなかった。

いや、知らない人間だけではないはずだ。あの船にはアンリの親友——親友？ いや、唯一の友だ。そんな陳腐な言葉じゃ言い表せ

ない——が乗っていた。彼の安否だけは気がかりだ。
背後で人の動く気配がした。お目覚めのようだな。

第三話

目が覚めた。岩のベッドの寝心地は最悪だったが、とりあえずの休息にはなった。おかげですっかり目が覚めた。体のあちこちが痛むのに耐え、立ちあがる。服がぬれたままだから、なんだか気持ち悪い。上に羽織った白衣を脱いだ。

「よう、お目覚めのようだな」

「っ!？」

突然声をかけられた。そういえば、誰かに助けられてここに来たのか。声のした方を見ると、人影がひとつ。体格と半分だけ見える顔から察するに、男か。

半分だけ見える。そう、彼の顔の半分は包帯で覆われていた。それでだけでも十分奇妙な風貌だが、それだけではなかった。右手に鎖の幾重にも巻かれた拘束具をつけている。さっきは意識がはつきりせず気付かなかったが、なんなのだこの男は。名前を聞いたはずだが、思いだせない。

「……………」

「おいおい、黙っていないでなんか言ったらどうだ？」

「あ……………ああ。そうだな……………助けてくれて、ありがとう」

「おう」

「……………」

「……………」

言葉を交わしたがいいが、お互いに面識がない状況では続かない。「……………あー、なんだ、その……………ずいぶん粹なアクセサリーをつけてるんじゃないか」

この際だ。その気になる格好について訊くとしよう。

「うん？ アクセサリーって？」

「その右手の鎖だ」

「ああ……………どうだ？ なかなか似合ってるだろう？」

「……………」

もちろんあれがアクセサリだんで、これっぽっちも思っていない。なのに奴はとぼけた答えを返してきた。あれは素なのか、それともなにか隠しているのか？ たぶん後者だろうが、確かめようがない……………」

「ところで、お前の名前をまだ聞いてなかったな。なんだ？」
そういえばそうだった。

「……アンジュール・ブリクソン」

「なるほど、アンジュール。……………」なあ、俺達、これからどうすればいいんだ？」

「これから？」

「そう。つまり……………」このまま、初めの目的を果たすべきか」

「……………」神の討伐」

「そうだ」

魔術教会。それがアンジュールの所属し、彼女をこんな場所まで連れてくることになった組織の名だ。魔法使いの管理というのが主な存在意義であり、世界中に支部がある。アンジュールはその研究機関に籍を置き、日夜難しい論理式や複雑に調合された薬品とにめろこする日々を過ごしていた。

そんなある日、突然上から命令が来た。曰く、とある任務に研究者として同行すること。移動手段は船で、行先は七月島という名前の絶海の孤島。任務内容は——神の討伐。

事前に受けた説明によると、その島にはかつて多くの魔法使いが渡ってきて、彼らは外部との接触を断って平和な暮らしを送っているという。現在に至ってもこの島の内情は本土の人々に知られることはなかった。

一か月ほど前、魔道教会日本支部の建物内に一羽のカラスが入ってきた。何度追い出しても執拗に侵入を試みるカラスは、職員のひとりが足にくくりつけられた紙に気付きそれを取ると一変して、どこへとも知れず飛び去った。

紙を広げると、そこには文字がびっしりと書かれていた。その内容を要約すると、曰く、

「この手紙が書かれたのは七月島である」

「七月島には神が存在する」

「神は魔力の塊であり、魔力のコントロールの補助を目的として島の住民によって作られた」

「しかし神は意志を持ち、住民にコントロールできるものではなくなった」

「ぜひとも本土の人間に神を打ち倒してほしい」

そして、七月島への海路が描かれていた。

島全体に魔力のあふれている七月島は、もとより魔道教会にとっては関心の的であった。手紙の言うところの「魔力の塊」たる神を倒せば膨大な魔力が手に入るはずだ。この手紙の信憑性は不明だが、試してみる価値はある。かくして、所属する魔法使いから精鋭が集められ、討伐隊が結成された。神の討伐を担当する戦闘隊と、魔力の分析、回収を担当するアンジュールたち研究体、そしてその他必要な人員を乗せた船は描かれていた海路を頼りに船旅に出た。

航海は、もう少しで島へ着くというところまでは順調に進んだ。

しかし……………

「しかしこのザマだ」

アンジュールは吐き捨てるように言った。

「協会としては、楽な任務を想定してたんだろう。腕のいいコックや、音楽隊まで同行させていた。でも……………結局攻撃を受けて、みんな死んだな。生きてるのは、あたしとあんただけ」

「……………ああ」

「これからどうするかだつて？ あたし達になにができる？ 今の状況すらよくわかってないんだぞ？」

「それは……そうだが」

「………わかった。状況を整理しよう」

残念ながら、対面の男は体力はあつても頭の方はいまいちらしい。言い聞かせるように話す。

「あたし達は、島のすぐ近くまで来る事ができた。そして攻撃を受けた。船は破壊され、みんな海に投げ出されて死んだ。……爆発したみたいだな」

ふと、疑問がわいた。

「なあ、敵は船で攻めてきた。だから戦闘要員はみんな外で戦った、これで間違いないよな？」

「そうだが……どうした？」

「敵に侵入を許したか？」

「うん？」

「つまり、あんた達は甲板に展開していて、敵はあたし達の船に乗り込んできた。甲板上で戦闘が起こったんだ。となると、敵の進攻先は船の中だが……敵はお前達を蹴散らして、船の中に入ったか？」

「いいや。どつちかというと、俺達の方が勝っていた。向こうの船に押し返す勢いで……」

「ところが、船の中には敵がいた」

男は驚いた顔をした、が、すぐに考え込むような表情になって、

「そういえば、船の中からこつちに、敵が出てきていたぞ」

「そうか。たしかに船の中に、敵が現れた。あんた達とは違って戦いのしかたも知らないような人間を、一方的に殺していった」

肢体を引きちぎられ、握りつぶされる仲間の姿を思い出した。そして、それを淡々と行う黒い影。見る見るうちに真っ赤に染まっていく船の壁。アンジュールはそんな地獄絵図の中を必死で逃げ回ったのだ。

「……奴らはそうやって、船内の人間を一掃した。それから……そ

れから、中にあったありったけの火薬を一か所に集めて火をつけた。だから爆発が起こって、船が割れた」

「なるほど。そういうことだったのか」

「問題は、あれだけの敵……物質を、どうやって船の中に持っていたかだ。あれが何であれ、かなりの数がいた。実行するには莫大な魔力が必要なはずだ」

船を爆破させたところを見るに、使い捨てのようで回収は想定していないようだったが。

「魔力か。なあ、あいつら魔力の塊かもしれない」

「なんで？」

「俺の友達があゝの敵と戦ってたんだが、あいつ、触った相手の魔力を無力化できるんだ。で、そいつがあゝの敵に触ったら、敵は一瞬で消えたんだ」

「……………つまり、あいつらは魔力でできているから、と？」

「そうだ」

「ということは、あゝの数、あゝの大きさ、あゝの密度の物体を魔力で練り上げたということだ……………ひとりの人間にできることじゃない」

ひとりの魔法使いでは出せないほどの魔力。魔力の塊。それを持っている存在といえば……………

「襲撃者は、神か」

その結論以外考えられない。

第四話

「神、か」

男は深刻そうな顔をして、黙った。これからなにをすべきか、まったくわからない様子だ。たぶん黙っていても答えは出てこないだろうな。

「いいか、敵は強い。それに対してこっちはふたり……しかも、あたしは戦いなんてしたことないぞ？」

男が黙って先を促す。

「……そして、この場所だ。船は七月島にかなり近づいていた。他に近い陸地はないし、あんたもそこまで長い距離を泳ぐ体力はなかっただろ？　だとするとこの洞窟は、たぶん七月島のだ」

「つまり、神の領域」

「そうだ。これからどうするか？　とりあえず、追手が来ないことを祈ろう。それからどうやってこの島から逃げるか考えようじゃないか」

「とりあえず、協会本部に連絡をとるべきだと思う」

ややあつて、祈李はきっぱりと言った。

「今のわたし達じゃ、これからどうするべきか考えることもできない。協会に連絡を取って、指示を仰ぐべきよ」

「……なるほど。でもどうやって？」

零二の質問。祈李は少し難しい顔をして、

「……わたしにはできない」

「そうか。俺もだ」

ここは絶海の孤島。ここから外部に送られてきた知られている限り唯一の通信手段は、伝書ガラスによるもの。なんらかの魔術を使

ったのだろつが、その方法を零二は知らない。祈李もなんだろう。船にはなんらかの通信設備があつただろうが、それも海の藻屑だ。遠く離れた誰かに自分の思考を飛ばす術があるかもしれないが、それも知らない。

「俺は、他にすることがあると思つてる」

今度は零二が自分の考えを言う番だ。

「まずは他の仲間を探そう。生き残つたのがいるかもしれない」

仲間を見つけるのは当然のことだし、その生き残りが通信手段を持っているかも知れない。そう訴えた。しかし祈李の反応は、

「生きている人間が、他にいると思ふの？」

否定的。

「なんだよそれ」

「あなたとわたしは、この神社の近くにある海岸に打ち上げられていた。でも、打ち上げられていたのはわたし達だけじゃない。ほかにも、十数人いた。その人達はどうなつていたのか、わかる？」

ああ、わかるとも。わかつている。

「みんな、死んでいた？」

「そう。いきなり海に落ちて、溺れた。みんな自分がどうなつたかなんてわからないまま死んだの。わたし達は運が良かっただけ。他に生き残つてる人なんているわけないわ」

「……………」

「疑つてるわね。それでも、まだ生き延びたのがいるかもしれない、そう思つてるんでしょう？　だったら、見てくればいい……………見つかつた死体は全部、この神社に集められてる」

「本当か」

「行つてくれば？」

挑発的な祈李。そして冷静さを欠いている零二。売り言葉に買い言葉、零二は立ち上がり部屋を飛び出して、

「おい、死体はどこにある！？」

外で待つていたさっきの巫女さん——たしか、笹川とかいう名前

だったか——を問い詰めた。

「え？ あ、こっちです」

動揺しつつも要望に従い、零二を連れて歩く巫女さん。

「……………ここです」

しばらく歩いて、目的の部屋までたどりついた。他の部屋と見た目は変わらない。襖を開けて中に入る。

部屋一面に、白い四角形が整然と並んでいる。それらすべてが、布団に寝かされた死体だ。その数、十数体。全部に白い小袖を着ていて顔に布が被せてあり、枕元に取り刀が置いてあった。

「身元がわからない死体が見つかるのは、年に何度かあることなんです。そんな時は身元がわかるまで、ここに安置しておくことにしてるんです。さすがにこれだけの数は、私は見たことがありませんが」

巫女さんの説明は、しかし零二の耳に入らない。手近にあった死体の布をはがし顔を確認。零二と同年代ぐらいの女の子。

「違う」

その隣、中年の男性。次は……………

次々に顔を確認していく。全部見終わるのにそう長い時間はかからなかった。

「……………いない」

「え？」

「いないんだ、アンリが。そうだ。あの船には百人近く乗っていたんだ。ここに全員いるはずがない。じゃあどこに……………」

「あの、どうされました？」

巫女さんが気を遣って声をかけてきた。

「なあ、このほかに死体はないのか？」

「はい。私の知ってる限りでは、これで全部ですけど……………」

「じゃあ……………じゃあ、アンリはまだ生きてるかもしれないんだ」

「え……………ええ、そうですね。お友達ですか？」

「そう。どうすればいいかな？　なんとかして探さなきゃ。ねえ、なにかない？」

矢継ぎ早で、しかもまくしたてるような言い方。しかし巫女さんは嫌な顔せずに、

「そうですね……とりあえず町に出ましょう。なにか知ってる人がいるかもしれません」

「そうか！　よし行くか………なあ、どうやって町に行けばいい？」

巫女さんにはっこりほほ笑んだ。取り乱していた零二でも思わず見とれるような笑顔で彼女は、

「いいですよ。案内します」

「ああ、頼む」

願ったり叶ったりの提案に、零二は迷わず飛びついた。

零二があわただしく出ていった後、ひとり取り残された祈李はじつと虚空を見つめていた。

「……ばか、どうしてあなたは……」

両目から涙があふれ、流れ落ちる。祈李は、それを拭おうともしない。ただただ涙を流し続けた。

「まあなんにせよ、ここから出ようじゃないか」

男の言うことは考えなしで、とりあえずの提案でしかない。とはいえ、それにはアンジュールも賛成だった。こんな場所にあまり長居はしたくないし、動かないことにはなにも変わらない。詳しい状況を知らず知らずまもらない。

「そうだな。出よう………でも、どうやって？」

アンジュールは立ち上がって、洞窟の入り口にまでいって頭上を

見上げる。崖という表現はどこまでも正しく、洞窟の上には岩肌が空高くのびていた。

「どうやるかって？ そりゃ、登るしかないだろ。ほら、つかまれ」男はこちらに背を向けしゃがんだ。背負うつもりか。アンジュールにはこれを登るだけの体力はないから、従うしかない。

それにしても、この男の右腕に巻かれている鎖はなんなんだ？ それと顔の包帯も。不気味さしか感じさせないこれは、ファッションでは確実にならないだろう。ではなんなのか。よく見ると拘束具のようにも見える。

「アンリ・ラ・マユ……」

「うん？ どうした」

不意に男の名前を思い出し、口にしてしまった。突然に名前を呼ばれた男は振りかえったが、アンジュールはなんでもないとごまかした。少しためらいながら、アンリの背中に触れる。

アンリ・ラ・マユ。それは、かつて何人もの魔法使いを殺害した人物の名前だった。

第五話

急かす零二を、詩乃という名の巫女さんは見事になだめ、着替えもせずに飛び出そうとした彼を引きとめた。さすがに寝巻で外に出すわけにはいかない。

「それで、探してる方……アンリさん、でしたっけ？」

まともな服に着替え、ふたりで神社を出る。この神社は高台の頂上にあり、町へ行くには長い階段を下らなければならない。その途中黙っているのも気まずいので、話しかけてみた。

「うん？ ああ、アンリ・ラ・マユ。俺の親友」

「親友、ですか。………大切な人なんですね」

「ああ。大切だ。生きててくれればいいんだが……」

そう言って七月零二と言う名の少年は少しうつむいた。まずい。もつと気まずくなってしまった。

「ええつと、それで……零二さんは……どうしてこの島に来たんですしたっけ？」

「……祈李から聞いてなかったのか？」

「ええ、ええ」

あの少女とは、詩乃はほとんど話していない。祈李は目覚めるなり詩乃と二言三言話したただけですぐに死体の安置部屋へ向かい、そしてすぐに元の部屋に戻った。そのままずっと無言。

「そうか。……じゃあ話すよ。俺達がここに來た理由」

零二は魔術協会の人間であること、七月島から來たと思われる手紙の存在、そして神。魔術教会は神の討伐をするために人員をよこした。その途中で何者かの攻撃を受けて船が大破、海に投げ出された。知っていることはすべて話した。傍から見れば奇妙な話だろうが、詩乃は黙って最後まで黙って聞いた。そして、

「なあ、それで……この島には本当に神がいるのか？」

そんな疑問をぶつけられた。たしかに零二からすれば、例の手紙に書かれてあった内容が真実かどうかはわからない。犠牲を出して苦勞してたどり着いたこの場所で、実は手紙の内容は嘘でしたなんてことはなんともやりきれない事態だ。しかしそれは杞憂である。幸か不幸かはわからないが。

「はい、この島には、神がいます。そしてわたし達の力ではそれを制御できません」

つまり、手紙の内容は全て正しい。

「……そうか」

零二はそれつきり黙った。もつといろいろ訊いてくるとも思ったが、なにか思うことがあるのか。今度は沈黙を破る言葉を思いつかず、長い石段を降りきるまですつと静かなままだった。

崖、それは空高くそびえたっている。アンリは軽々と登っているが、体力の無いアンジュールにとっては人ひとり背負って登りきるのは無理な話だ。

「アンリ、なあ」

アンリの背中にしがみつき、だんだん離れていく海面を見ないようにながらアンリに声をかけた。視界に入るのはアンリの背中とごつごつした岩肌のみ。

「なんだ？」

「あんたのこと、いろいろ知っておきたくて。いくつか質問していいかい？」

「おう、なんでもきいてくれ」

「じゃあ……」

アンリ・ラ・マユ。アンジュールの知っている限りその名前は、自身とおなじ魔法使いを千人近く殺した人間のものだ。殺害方法や

詳しい事情はわからないが、彼は今しかるべき機関の手により捕らわれ、監視下にあるはずだ。こんな所にいるはずがない。同じ名前という可能性はあるが、素性を知っておくにこしたことはない。

「あんたの所属番号を教えてくれ」

魔術協会に所属する者は全て、個人に固有の番号が与えられている。それが個人の識別に使われ、また個人の所属する部署を端的に表すのに役立つ。例えばアンジュールの場合『jpr s0402』日本支部の研究部署、第四班の次長を表している。各班の班長には一番、次席には次長には二番の番号があてがわれ、それ以外の班員には名前の順番に三番以降の番号が当てられるという仕組みだ。そしてこの男の番号は……

「うーん、忘れた」

「忘れた？」

そんなことあるものか。

「いや、そんなものがあつたとは思うんだが……なんせ、俺部外者だからな」

「部外者？ どういうことだ？」

「魔術協会に友達がいてな。この作戦をするのに強力な魔法使いが必要ってことで、そいつから声がかつたんだ」

そつえばそつという話も聞いたことがある。十分に強い魔法使いであれば外部の人間であつても協力が欲しい。協会が募集をかけてたらしい。アンジュールにとっては関係のない話と大した関心も持たなかったが、そついう人間は臨時に番号を振り当てられ、この男のような連中は番号なんて覚えてないかもしれない。

しかし、協会内に友達がいてこついう作戦に参加できるということとは、そつ物騒な素性の人間なわけではないのかもしれない。まだ油断は禁物だが。

「その友達ってのは？」

「七月零二つて奴。戦闘員だ。番号は知らん」

聞いたことのない名前だ。苗字がこの島の名と同じなのは偶然だろうか。

「そうか。そいつも、船に乗っていたのか？」

「そうだな。どうなったのかは知らないが、たぶんどこかで生きてるんじゃないかな。あいつ丈夫だし」

なんとという樂觀主義。

「それで、次の質問だが……」

そして、最も重要な質問。

「作戦に参加する前は、なにしてたんだ？ その、仕事してたとか、そういうの」

「そうだな。仕事してた。土木仕事」

「土木仕事？ あんた、魔法使いだろ？ なんでそんな肉体労働を？」

土木仕事なんて単純労働、魔力の使えない筋肉バカの仕事だ。魔法使いは、その能力を生かしてもっと複雑な仕事をするか、あるいは戦闘能力を買われ兵士や要人警護の職に就くものだ。

「いやそれがさ、俺魔法の使い方よくわからなくて。ややつこしい術とかできないんだよな。体に魔力を回して力を上げるぐらいしかできん。だから怪力はすごいんだが難しいことはできないんだな」
なるほど。要するに、バカということか。ちゃんと魔法の勉強をすれば魔術を使えるようになるものだが、そんな機会もなかったのか。

しかし、わからない。この男が魔法使い殺しの犯人なのか、それともただの同名の人物なのか。質問の回答はみな、判断材料とするには曖昧すぎる。

むしろ曖昧なことしか話せないというのは、ものすごく怪しいということだ。この男と、これから一緒に行動するべきなのか？

「着いたぞ」

「……そうか」

思案している途中に、アンの声が聞こえた。登りきったのか。怪力というのは間違いないらしい。

潮の香りが遠ざかり、緑の香りが鼻をついた。崖の下からは見ようがなかったが、ここは森の中。さて、これからどうしようか。

第六話

「ここ日和町は、七月島の東側にある港町なんです。あんまり大きくないんですけど、みなさんとっても仲がいいんですよ」

長い長い階段を抜け、しばらく歩くと建築物の多く並ぶ場所にたどり着いた。なるほど、通りに出る人の数は決して多いとは言えないが人々の顔は一樣に明るく皆楽しそうだ。戦いとは無縁な平和な町。そんな印象だ。たぶんそれで正解なんだろう。

この街で生産される物といえばほとんどが魚とその加工品で、その他の物資は他の町との交易で行われている。詩乃はそう説明した。「なるほどな。それで、アンリがどこにいるか調べるにはどこに行けばいい？」

とはいえ、今の零二の関心事はそのひとつだけなのだが。詩乃は少し呆れた様子だが、少し考えて言った。

「そうですね。やっぱり人の集まるところがいいでしょうね。酒場とか」

「そうか。行こう」

「はい。案内します」

詩乃の言うには、港のすぐ近くに、夕刻仕事を終えた海の男が一杯やる酒場があるとのこと。この時間から彼らが大勢いるわけではないが、それでも仕事をさぼった男どもが飲んでたりして、この付近で最も人のいる場所だ。

少し古びた外観の木造建築の建物。あまり大きくはないが、中の活気が微かに外に伝わってくる。扉を開けようとした詩乃は少し思いとどまって、

「そうだ。零二さんのことですけど」

「なんだ？」

「この島の人って、島の外の人間を見たことないんです。だから、ここで零二さんの正体を言ったら騒ぎになると思うんです」

「そうなのか？」

「はい」

かつて魔法使いが無人島だったこの島に渡って以来、外界との接触は完全に断たれていた。魔術協会きた手紙は、零二の話を聞く限りは正しいことが書いてあったが、誰が書いたのかはわからない。たぶん手紙の存在を知っている人間は、島の人間では詩乃とあとひとりだけ。手紙を出した本人。

そして零二が外から来たことを知っているのも、この島にはほとんどいない。魔法使いの子孫たる島の住民に、会ったことのない外の人間を接触させない方がいい。詩乃はそう考えた。説明が面倒だし、たぶん必要のないことだ。

「そうですね……零二さんは流されてきた、記憶喪失の男、ってことにしませんか？ 海岸に流されてきたのは事実ですが、自分のことはよく覚えてない……あ、名前だけ覚えてるということに」
「なるほど」

「それで、自分が誰なのか手がかりを探しているということに。他に流された人がいたらなにかわかるかもしれない、とかなんとか」

「ああ。わかった。よし行こう」

「ああ、ちよつと待ってください」

零二は少しそっかしいようで、早く店の中に入りたがってうずうずしている。詩乃の話を理解しているのかも怪しい。これじゃあ芝居がばれる。もっとも、芝居を打つの望んでいるのは詩乃だけなのだが。しかしこれは零二のためなのだ。

「いいですか、あなたが島の外の人間だつてばれたら本当に騒ぎになるんですよ」

「そうか？ お前は騒いでるようには見えないが」

「む……とにかく、必要なことは私が全部聞きますから。零二さんは黙っていてくださいね」

「……………わかった」

なんとか納得してくれたようで、詩乃はようやく扉に手をかけた。

酒場の中に入ると、ふたりは大きな喧騒に包まれた。がたいのいい男達が酒を片手にがやがやと談笑している。数はあまりいないがなにしろ声大きい。その中のひとりの男が入口の詩乃の姿を認めて破顔した。

「やあ詩乃ちゃん、久しぶり。よく来たね。隣の男は彼氏かい？」

ガハハと、その男は自分で行った言葉で豪快に笑いだした。釣られて周りの男どもも笑う。本当に、いつもいつも楽しそうな人達だ。「そんなんじゃないですよ。ほら、海に誰か打ち上げられてるって話、聞きませんでしたか？」

聞いているはずだ。今日の朝、零二を見つけたのも神社に知らせに来たのも彼ら海の男なのだ。

「おう！なるほど、そいつか」

「ええ。とりあえず目を覚まして、元気そうでなによりなんです、ちよつと困ったことになりました」

「ほう。なんだ？」

「彼、どうやら記憶を失っているみたいなんです。名前はわかってるんですが、自分が何者なのか、どこから来たのかもわからないようで」

「本当か！それは大変だな坊主！」

いきなり話を振られた零二は一瞬ビクッとして、それからこくこくと無言でうなづいた。なんだかんだで言いつけは守っているな。

「それで、なにか手がかりがないかなって。この人が倒れてた場所になにかあったとか……他の人が倒れてたとかってありませんでしたか？」

「たしか、ふたり見つかったって話じゃなかったかい？」

もうひとりの、祈李という少女のことか。

「ええ。もうひとりもうちの神社で保護してるんですが……えっと、まだ意識が戻ってなくて」

「そうか。おいお前ら、なにか知ってないかー？」

まだあまり客のいない時間帯。男どもは皆詩乃の話に聞き入っていた。詩乃が話かけた男が彼ら全員に訊くが、芳しい答えは返ってこない。

「まあ、そんなわけだ。すまん。力になれなくて」

「あ、いえ、気にしないでください」

「そうだな。源じいさんならなんか知ってるかもしれない。あのじいさんがこの坊主を見つけたんだ。今は漁にでてるから、夕方にまた来てくれ」

なるほど。出直してきた方がいいようだ。

「わかりました。では、また来ます」

とまあ、そんなことを言おうとした。結果的には言えなかった。というのも、言おうとしたその瞬間に、店の入り口から妙に慌てた様子の男が入ってきたからだ。大きな音を立てて膝からがっくりと床に崩れ落ちる。

「おいおい、あんた八っちゃんじゃないか。どうしたそんなに慌てて」

ハちゃんに、他の客の男が近づいて話しかけた。ハちゃんといえば肩で息をしながら、なにか言おうとして喉が枯れているのかぱくぱくと口を開け閉めしているだけだ。まったく声になっていない。「ダメだこりゃ。おい誰か水持ってきてくれ」

男がそう言くと、すぐに店員らしき若者が杯に水を入れ持ってきた。ハちゃんはそれをなんとか飲み干し、そして、

「みんな逃げてくれ！ 怪物が出た！」

そう叫んだ。直後、入口から真っ黒な手が伸びてきて、ハちゃんの手を掴み、握りつぶした。

第七話

脳髓と血が辺りに飛び散る。影の握りこぶしからも液体が滴り落ちていく。誰かが悲鳴を上げた。周りの人たちがガタガタと音を立てて椅子から立ち上がった。しかしなにをすればいいのかわからず、茫然と突っ立っているだけだった。

誰もが固まっている中、真っ黒な影が酒場の入り口からぬつ、と姿を現した。これがなになのかを知っているのはこの場では零二だけだったが、目の前で起こった惨事は全員に身の危険を感じさせるのには十分なインパクトがあった。人々が呆気にとられていたのは一瞬で、店内はすぐにパニックになった。逃げようと試みる人達。しかし影は出入り口から入ってきたわけで、逃げ場はどこにもない。騒ぐ人間を、影はゆっくりゆっくり歩きながら順番に殺していった。我先にと店の奥へと逃げる人の流れに、零二は逆らうように立ち、影と店の入り口をじっと見ていた。詩乃は逃げたそうだったが、零二の様子を見て近くに踏みとどまっている。

影がもう一体、店に入ってきた。それを確認した零二は、店の中の人を助けるべく声を張り上げた。

「俺が奴を倒す！ みんなはその隙に逃げろ！」

しかしその言葉を聞いたのは傍らにいた詩乃だけ。

客は皆後ろの方に退避して、そこから先に進めない。零二の目の前には数匹の影がいるだけで、両者の間に遮るものはない。

一瞬迷ったが零二は意を決し、詩乃の手を掴んで、

「ついて来い！」

腕の先に魔力を集中させて影に突っ込む。影も零二に襲いかかるうとした。両者が触れ合った瞬間、影の方が霧散して消えた。その勢いで次の影に触れる。触れた瞬間に消えた。次も同じく。今店にいる影はすべて消た。勢いのまま店の外に出る。

外も地獄だった。人通りの決して多くなかった場所であつたが、見渡すかぎりには影がいて、血だまりや死体が転がっている。生きている人間は見当たらぬ。詩乃は少し視線を落とし目を背けた。

影のひとつが零二を見つけた。この周囲で生きている人間は零二と詩乃だけであり、他の影も次々にふたりを認識した。刹那の間、後、一斉に襲い掛かってきた。詩乃をかばうように立ち、先頭のひとつを消す。次のひとつを避けてその背後のを消す。

数が多い。魔力を固めただけのこの敵に対して零二の能力は無敵に等しいが、詩乃はそうではない。守りながら戦い続けるには無理がある。

いくつか消した後、零二は詩乃を片手で抱え、片手で影に触れながらその場から離れる。影のいくつかは追いかけてきた。残りは、まだ人のいる酒場の中に。

「あの、零二さん」

「とにかくどこかに逃げよう！」

「はい！」

見渡す限り死体しか転がっていない。どこに行けばいい？

「これからどうするんだい？」

森の中、アンリとアンジュールは向かい合つて地面に腰を下ろした。方向がわからないのに動き回るのは危険だ。

「どうするって、任せる」

アンリはこんな調子。本当に頭を使うのは苦手らしい。

「そうだな………とりあえず人のいる場所に行きたい。なにをするにもそれからだ。人がいる場所ってどうすればいい？ 川を見つめる………つてのは山に限った話か」

考えた方がいい方法は思い浮かばなかった。

「とにかくひとつの方向にまっすぐ進むしかないかな。いつかは森を抜けるだろう」

「ほう、どうすれば？」

「とりあえず南に行く。木の枝を見ても。大きく伸びている方向があるだろう？ 植物も日当たりのいい方向に育ちたがるんだ。つまり、南だな」

「なるほど。行こう」

「……はいはい」

崖を登るのには役立ったが、やっぱり脳みそ筋肉か。馬鹿とはさみは使いようとは言うが、どうしたものか。

「大変だー！」

神社の部屋でひとり泣いていた祈李は、誰かが言った声で我に返った。なにかあったのか？

涙を拭って部屋を出て、声の主を探す。外か。

「どうかしましたか？」

神社に行くためには階段を登らないといけならしい。その階段を必死に登ってきたと思いきひとりの男が、地面に両手をついて肩で息をしている。それに声をかけているのは、この神社の巫女さんか。詩乃とはまた別人だが。

「あ……ああ、町で、町で」

「はい、町で？」

「町でなにか黒いものが暴れていて、みんな……みんな死んでいつてる！ それで！ それでこっちにも向かってきてるんだ！」

「！」

黒いもの、それがなになのかは祈李には容易にわかった。あれだ。

あの影だ。

「すいません！」

祈李は巫女さんに話しかける。この神社の人を守らないと。

「紙と書くものを用意してください！」

もうあの時みたいに、人を死なせるわけにはいかない。絶対に、絶対にだ。

第八話

神社の巫女さんが持つてきた半紙と筆をひったくるように受け取り、地面に置いた。小声で呪文を唱えながら、半紙に文字を書き連ねていく。普通の人には理解できない文字を、祈李はさらさらとよどみなく書いていく。

時間が無い。あまり複雑なことはできない。もっとも単純で、ただただ強いだけの魔術。それをかけるために筆に魔力を注ぎ込んだ。もう少し、もう少しで術式が完成する。

「できたっ！」

最後の一筆に特に力を込める。完成だ。隣で黙って見ていた巫女さんが、静かに尋ねる。

「それは……なにをするおつもりで？」

「結界を張ります。この神社の内側と外側を完全に隔離して、何者も通れないようにするんです」

答えつつ、半紙を折りたたんで先のとがった棒状にする。

「その結界は、好きなように解いたり是可以するんですか？」

「いいえ。一度張ったら魔力が尽きるまでは絶対に消えません」

折った半紙を、神社の門、階段の所に投げる。巫女さんが待つてと制止しようとしたが、間に合わなかった。祈李に伸ばしたその手をむなしく宙に遊ばせ、引っ込めた。

半紙のとがった方が地面に突き刺さり、光る。祈李は神社の全体をイメージし、すべてを覆う結界を張る呪文を唱えた。光が、祈李のイメージした範囲を駆け巡り、消えた。

「これで、この神社の敷地内は外と完全に隔離されました。敵がよっぽど強くない限りは、安全です」

これで、この神社の人を守ることができる。達成感を感じつつ巫女さんの方を振り返り、そして様子がおかしいことに気付いた。

「……あなたの魔力や技術については知りません。しかし、私達に

も、結界ぐらいは張れる者がいます。それに……」

少し言い淀んだが、はつきりと、祈李に恐ろしい事実を告げる。「なにかあった時、この神社に逃げ込んでくの方も大勢います。こは、緊急時には避難所として皆さまに解放することになっていきますから。そういう時は、結界を解除して、中にいれてあげます。どんな危険が迫っているにしても、そういう配慮をしなければ、人を守ることはできません………あなたは、ここを守るにより、ここに助けを求める人を見捨てました」

祈李は向かい合っている巫女さんが、しかし祈李を見つめていないことに気付いた。祈李の後ろのある一点。神社の入り口たる、階段のある場所。

恐る恐る、巫女さんの視線を追う。息も絶え絶えな男女が五人ほど、神社の敷地内に入ろうとしている。しかし見えない壁に阻まれてそれはできない。

「もう一度確認します。その結界は、解くことはできないんですね？」

祈李の魔力を全力で注ぎ込んだ結界。その起点である半紙の棒を壊せば結界は消えるだろう。しかしとにかく固くすることにだけ特化したこの結界は、半紙自体の強度も魔力の影響でべらぼうに高くなっている。

今すぐに、この結界を消すことは不可能だ。

祈李はよろよろと階段の方に歩いていく。なんとかできないか。自分の作った見えない壁は冷たく、どこまでも無機質だった。その向こうで、知らない人間が必死になにか言っている。結界は音すらも遮ってしまうため、その言葉を聴きとることはできない。

「なんにしても、手遅れのようにですが」

巫女さんの声。そして気付いた。真っ黒な影が、階段を登ってこっちに向かってくる。

「その結界の強度は、十分なんですよね？」

「はい。堅さだけは」

「……………そうですか。とりあえず、私達や神社を守ってくれるのには感謝しています。ただ、確認が間に合わなかったのと運が悪かった。それだけの悲劇です」

淡々と、感情を押し殺したような言葉は、しかし微かに震えていた。それを聞きながら、祈李の目は結界の向こう側にくぎ付けた。あわれ、向こう側の人々はこちらになんとか入ろうとするのに必死で、影の接近に気付いていなかった。影はまず、ひとりの体を持ち上げ、別のひとりの体にそれをたたきつけた。血と肉と、骨と臓物がぐちゃぐちゃになったものが飛び散った。ここに至りようやく残りの人は影に気付いたがもう遅い。血をまきちらしながら惨殺されていくだけだった。

祈李はへなへなとその場に座り込み、地獄絵図を力なく見つめる以外になにもできなかった。全員を殺した影は、祈李を次の標的に選んだのか歩みを進めようとしたが、結界のせいではかなわない。なおも諦めない影は、拳で力任せに結界をどんどん叩き始めた。しかし単なる物理攻撃で、そう簡単にやぶれるものではない。さすがは、無辜の人々を拒んだ結界だ。

祈李はといえば、茫然自失で影の様子をただただ眺めているだけ。もうなにもしたくない。このまま影に殺されたい。そんな考えすら頭に浮かんだその時、

影の体が揺らぎ、倒れると同時に消失した。

「え…………？」

影が誰かに倒された。それは理解できた。でも、誰が？

そのままじっとしていると、誰かが階段を上がってきた。影ではない。長い髪と切れ長の目が特徴的な、美しい女性だった。手には二丁の拳銃。これで影を倒したのか。女性は結界の所までたどり着くと、座ったままの祈李を見下ろしながら結界にてを触れる。しば

らく結界をなでていたと思えば、祈季に笑いかけながら背を向け階段を降りていった。

誰なのかわからない。でも、かつこいい人だった。

第九話

「おい、ちょっと止まれ」

森の中を南を目指してひたすら歩いていると、アンリが唐突に声をかけてきた。

「なんだ？」

「聞こえないか」

「……………」

耳をすましてみたが、なにも聞こえない。

「なんなんだ？ なにがあるって？」

「戦闘音。というか、一方的な虐殺の音」

「そうか？ なにも聞こえないが」

「耳は良いからな。どうする？」

「音はどこから？」

「南」

なるほど。どうするべきだろうか？

面倒事に巻き込まれるのはごめんだ。アンリがどれだけ強いかわからないし、アンジュールは戦闘など一切できない。

しかしまっすぐ進みたいのは当然だ。ここで進路変更したら今までの道のりが無駄になる。それに、

「虐殺ということは、人が大勢いるのか？」

「そうだ。人同士が戦っているとは限らないが」

人が大勢いる。つまりは集落だ。とすると、一応の終着点は近いということになる。今から別の集落を探すなんて面倒にすぎる。

「なあ、アンリ」

「うん？」

「あんた、強いのか？」

ストレートな質問。相手の目を見てその心を読みとろうとするが、

あいにく仮面の向こうを見透かすことはできない。

「おう。任せろ。どんな奴だって倒してやるさ」

「……………」

これだから馬鹿は嫌いだ。自分の力を過信して、そして痛い目に遭う。その言葉を信頼することはできない。

しかし……信じてみるのも悪くはないかもしれない。それしか方法が無いのならば、な。

「よし、行こう。……ちゃんと守ってくれよ」

「心配するな。俺は強い」

詩乃の手を引いて、行き先もなくただ夢中で逃げ回った。影はどこまでも付いてきて、ふたりに襲い掛かる。零二ひとりだったらただ無茶苦茶に暴れまわるだけでこの影を全滅させることはできるだろう。しかし詩乃を守りながらでは、そううまくはいかない。一瞬でも詩乃から離れれば、その瞬間に影が詩乃の体を握りつぶすかもしれないのだ。

だから、戦うのはこっちに仕掛けてきたのだけ。手を伸ばして影に、詩乃をかばいつつ触れる。それだけで影は消えう失せるのだからやること自体は楽である。終りが全く見えないのが難点だが。

影は際限なく現れた。次々に新しく生まれているのか、そもそも現れた数が膨大なのか。いつまでこの状況が続く？

詩乃の息がだんだんあがってきた。もともとそんなに体力があるわけでもなさそうだ。なんとかして状況を打開しなければ。また襲い掛かってきた影を消しながら、辺りを見渡す。当然ながら、ここがどこかわからない。さっきの酒場からどれだけ離れたのかもだ。

影がまた追ってくる。逃げるか戦うか。

「この先に行くとか森に入ります」

詩乃が言った。え？　っと聞き返すと。

「森に入れば、戦いやすいのではないでしょうか。敵は体が大きいので、木の間を縫って動き回るのは難しいはずです」
「なるほど」

三匹ほど、一斉に襲い掛かってきた影を片付けた。それと同時に詩乃を抱え上げ

「行くぞ。しつかりつかまってる！」

「え？ あ、あの、はい！」

驚く詩乃に構わず、走り始めた。影はまた追ってきている。ぐずぐずしてはいられない。しばらくしたら木々の群れているのが見えてきた。あれか……

「なにか来た」

アンリの言葉に、アンジュールも身構える。

「敵か」

「わからん。足音がいつくか。ひとつだけ早くて、残りは遅めだ。どうする？」

「隠れよう」

向かう先で戦闘なり虐殺なりが行われているとするならば、我らに仇なす存在がこちらに向かっている可能性は大きい。虐殺の場合、向かってくるのが罪なき市民であるかもしれないが、アンリのいうことには追う者と追われる者の構図ができているらしい。とするならばいずれにしても戦闘になる。

戦闘は避けたい。アンリの戦闘能力は知らないし、命はむやみに賭けるものじゃない。だから隠れてやり過ごそうとした。しかし、
「いや、ちよつと待て。これはいいぞ」

アンリは意味のわからないことを言いだした。

「おい、どういうことだ」

「お前は隠れてろ。俺は戦う」

「はあ？ なに言ってるんだ馬鹿。無駄に戦って疲れたり傷を負う危険を冒す意味はないぞ」

「いいから、そこに隠れてろ！」

そう言い残してアンリは音のする方向に駆けだした。あの馬鹿、脳筋野郎が。単に暴れたいだけの低能が。

自分だけここに居座るのも危険だ。この隙に何者かに襲われたらひとたまりもない。アンジュールは戦えず、アンリほど耳が良くない。少しためらったが、アンリのあとを追いかけた。

頼むから面倒な事にはならないでくれよ。そう祈りながら走った。

第十話

木々の間を抜け、ふたりは走る。一瞬振り返ると、やはり影は木々に阻まれ追う速度が落ちている。こちらとの距離は離れるばかりだ。

これはいい。詩乃をここに置いておいて、ひとりであそこに向かえば楽に敵を全滅させられる。詩乃に危険が及ぶこともない。

「よし、詩乃。しばらくここにいてくれ。動くなよ」

それだけ言つて、零二は返事を待たずに影の群れへ走る。いつの間にかずいぶん距離を開けていたようだ。

動きが極端に制限されているらしいこの場所で、この影を消すのは難しくはない……………

「よう！ 兄弟！」

「！？」

突然、頭上から声。零二の真上を飛び越えたなにか。大柄な人間。協力するぜ！ こいつらをぶつとばせばいいんだな！」

「あ、ああ！」

突如現れた男、アンリ・ラ・マユの言葉を肯定し、零二は影の集団に躍りかかった。

「な、え……………誰、ですか？」

ここでじつとしてると言われた詩乃は言いつけを守りつつ、突如自分の横をすり抜け零二に追いついた謎の男に驚いていた。零二と協力して影を倒しているから、敵ではないと思うのだが。

「くっそ！ 勝手な……………こと……………しゃがって……………はあ……………はあ……………」

「……………」

そしてもうひとり、白衣を着た女の人が詩乃の傍らまで走ってき

て、そこで息が切れたのかへたりこんだ。あの男の人の関係者だろうか？

「あの、すいません。ひとつお聞きしてもよろしいですか？」

「……なんだ？」

「あれは、なんなんですか？」

「………知るか。こっちが聞きたい」

「そうですか」

影を持ち上げ地面に叩きつける。振り返りながら別の影に振りかぶり、重い拳を食らわせる。零二のように圧倒的な能力を持っているわけではないが、格闘だけで影に対して一切の苦戦をしていない。化け物。零二はアンリを常々そう思っていた。彼の戦闘は、ただひたすらに単純でスマートではない。砕き、潰し、引きちぎる。血と肉と、骨と臓器を撒き散らし、その山の中で泳ぎ、雄たけびをあげる。

影の中のおそらく頭にあたる部分を胴から無理矢理引きちぎった。同時に消え去る影。次の獲物を求めて振り返った先で、零二が最後の影を消した。

「なんだ。これで終わりか。つまらん」

不平を洩らすアンリ。こういう性格なのはわかっているさ。

「そう言うなよ。戦いは楽な方がいい。死なないから」

「わかったよ………零二、よかった。よく無事だったな」

「そっちこそ。ま、俺はお前が生きてるってわかってたけどな！」

「そうか。実は、俺もだ」

ふたりで笑い。そして肩を組む。無二の親友の無事を喜び、

「はいはい。感動の再会はいいいから、詳しいことを話さない」

白衣を着た女に止められた。その後ろについてくる詩乃。アンリと零二は顔を見合わせ、

「おう！ アンジュール！ 紹介するぜ！ こいつが七月零二。親友だ」

と、白衣の女に言った。説明はこれで十分だった様子のアンリに、アンジュールと呼ばれた女は深くため息をつきいた。

「オーケイ、とりあえず落ち着いて話をしよう、な？」

森の中、四人で円になって座り、まずは互いの自己紹介。そして現状把握。

「つまり、船の乗員で生き残ったのは、今のところ私達三人しかないということだな」

話のまとめ役はアンジュールだ。

「いや、もうひとりいる。たしか祈李って名前の女が。今、こいつの神社にいるはず。そいつのことはよくわからないが、船に乗ってたのは確かだ」

零二が詩乃を指さし、アンジュールはうなづいた。

「なるほど。四人、か。とりあえず、その神社に行こう。その女がなにか知ってるかもしれない。とにかく合流して、今後の動きを決めよう」

「今後の動きってのは、例えばなんなんだ？」

アンリの質問にアンジュールは少し考え、そして詩乃を見て。

「さあな。なににも浮かばない。とりあえず行こう。アンリ、敵はいないか？」

「とりあえず戦闘音は聞こえない。ここら辺は大丈夫だろう」

「よし。……詩乃さん、案内してくれ」

うなづく詩乃の先導で、一行は移動を始めた。

祈李渾身の”強力な”結界はその後も順調に効果を発揮し続け、無辜の人々を神社に入れるのを拒み続けた。結界によって体力の消耗した状態で必死に反対呪文をかけている間、結界の外にいる人間は神社の中に入ることはできない。幸いにして影の再度の襲来はなかったが、いつ来てもおかしくない状況であり、人々の顔に張り付いた恐怖の表情が一層祈李を攻め立てた。

ようやく結界が解除でき、人々が神社になだれ込む。影から逃げて疲れきっている人。怪我をしている人もいる。巫女さんがそんな彼らを気遣い、手当する様子を、祈李は茫然と見ているだけだった。

第十一話

戦い、というよりは一方的な虐殺が終わった町の様子は、凄惨たるありさまだった。あちこちに血と臓物の飛び出た死体と、建物にあるいは生活用品だったであろう木材の破片があちこちに転がっていた。子供がひとり、女性の死体にすがりついて大声で泣いていた。母親なのだろうか、その死体には、首から上がなかった。

ところどころ、火の手が上がっている家もあり、生き残った人間もその対応のために休むことは許されない。死体をまたぎながら水を運び、被害の拡大を急ぐ。またある人は死体を担いでどこかに運んでいた。安置場でもあるのだろうかと考えて、零二は神社の一室を思い出した。一面に、死体の置かれた部屋。

「この死体も、やっぱり神社に運ばれるのか？」

零二の後ろを歩き、転がる死体から目を背けるように零二の背中をじっと見つめていた詩乃の尋ねる。詩乃は少し考えてから、

「ええ。そうだと思います……あまり多いと収まりきらないかもしれません」

そうとも。いったいどれほどの人が命を奪われたのであろうか。

あの、影によって。

「……なあ、アンジュール」

零二はふと気がつき、アンジュールに訊いた。

「この人達はみんな、あの影に殺されたんだよな？」

「ああ、そうだろうな」

「俺達の船を襲ったのも、あの影だ」

「……………なにが言いたい？」

その言葉は、言外にこれ以上言うな、ということを含めていた。零二はそれに感づいたが、それを聞いていたアンリは気付かなかった。

「実は俺達もそのことについて話してたんだが、あの影は神が俺達に

向けた刺客なんじゃないかって」

「言うな。それ以上」

アンジュールが低く、ドスの効いた声を出した。反射的に黙ったアンリを睨みつけ、次いで詩乃に少し気遣うような視線を少し向ける。

「……そうだよ。あの影はあたし達を殺すために神が放った、刺客だ。まず船であたし達を遅い、ほとんどを殺した。そして生き残りがいるのを把握して、追っ手を用意した。………ここで殺された人達は、あたし達の巻き添えで死んだ。何の罪もないのにな」

詩乃が息を呑む音。アンジュールも申し訳なさそうな顔をして、「詩乃さん、すまない。この島で多くの人が死んだのは、あたし達のせいだ。………それでいて、あたしには以外あんに謝る度胸もない。……この人にこの話を知られて、恨みを買う度胸なんてな」

「……………」

立ち止まり、沈黙する一同。零二とアンリの視線は、たった今謝罪された詩乃に向いていた。

そうとも。この島の人間にはなんの罪もない。なにの殺された。今ここにいて、海の方こうから来た望まれぬ客人のせいで。それを、ここにいて生き残った住民が知れば、どうなるだろうか？

「え……えっと……………」

なにか言いたげな様子だったがその言葉を飲み込んだような様子。「と、とりあえず神社に戻りましょう。いろいろ考えるのは、それから」

「………そうだな」

アンジュールも思うところがあるだろうが、しかし今はそれどころではないのが事実。

まず神社に行き、祈李と合流し体勢を整える。そして状況をまとめ、今後の方針を決める。

いつになるかはわからないが、影は次も襲ってくるだろう。

我先にと駆けこんできた人の群れも、だんだんと落ち着いてきた。そして、次に多くの死体が運び込まれる。あの部屋、神社の中の死体置き場に入っていくのか。あの内のどれぐらいが、祈李のミスによつて生まれた死体なんだろう？ 作る必要もない結界を張つて、安全地帯に逃げ込めなかった人達。

騒ぎが終わつて一段落したのか、無事だった人間が集まつて互いの無事を喜び合い、そして死んだ者を悼む様子がそこかしこで見られた。新しく神社にやってきた男が、影はもういなくなつたと皆に告げ、空気がふつと和らいだ。あわただしく働いていた巫女さん達も、少し手を休める。先ほど祈李に筆と半紙を渡した巫女さんが、地面にへたりこんだままの祈李の傍らにやつてきた。

「さきほどは失礼しました。つつけどんな態度をとつてしまいました………いつも言われます。もっと優しげに人に接するべきだつて」

なんとなく冷たいと言うか抑揚のないしゃべり方をする人だなと感じていたが、どうやらそういう性格らしい。

「感謝はしてるんですよ。人命が失われたのは事実ですが、この神社を守ってくれたのは事実ですから。私達が張つた結界で、あの化け物を防げたかどうかはわからなかつたわけですし」

なんだ。いい人じゃないか。そう思いなおして、なにか返事をしようといふ口を開いた、その時。

——なあ知ってるか？ 神社に入れずに死んだ奴が大勢いるらしいぞ。

——神社に入れない？ どういうことだ？ ちゃんと入れたじゃないか。

——いやそれがさ、噂によると結界が張ってあつたって話で。

——おいおい。巫女さんの張った結界なら、好きに解除できるはずだ。入れないなんてそんなはずが。

会話が聞こえた。自分の罪を糾弾する会話が。思わず立ち上がった、そして、

「ごめんなさい！」

突如聞こえた謝罪の言葉に、周囲の注目が一斉に祈李に集まった。巫女さんが止めようとしたが間に合わない。

謝るんだ。全部説明して、それで謝るんだ。祈李の頭にはそのことしかなかった。

第十二話

「ごめんなさい！ 全部私が悪いんです！」

瞬間、その場にいた全員の視線が祈李に集まる。巫女さんだけは、諦観したように視線を落とした。

「ごめんなさい。みんなが神社に入れなかったのは、私のせいなんです」

そしてすべてを話す。結界のこと、そのせいで神社に逃げられず、死んでいった人が大勢いること。すべて巫女さんに任せていればみんな死なずにすんだということ。死んだ人はみんな自分の置かれた状況がわからないまま死んでいったということ……。

しゃべり始めたら止まらなくなる。見かねた巫女さんが制止するまでなにか言つてた気がする。

我に返り、周りを見回す。祈李を見つめる目は皆厳しいもので。刹那、罵声があがった。それに続いて声をあげる者がいて、いつしかその罵声は幾重の厚みのある合唱となって祈李の心を突き刺した。子や親や友を失った人達の叫びが聞こえる。

ああ、これが報いだ。ここの人達に任せればよかったものを、部外者が出しゃばってしなくていいことをした。その結果死人が大勢出たんだ。だからその罵声を、ただうつむいて黙って受け止める。不意に、頭に鈍い衝撃を感じた。誰かが石を投げたのか。ひとりが始めるとみんなそれに追隨する。そろそろまずいと思ったのか、隣の巫女さんがなにか言おうとしたようだが、

「お前ら、いいかげんにしな！」

別の声に遮られた。知らない、女の声。途端に、静寂が訪れる。何があったのかと顔を上げると、誰かが祈李をかばうように前に立ちふさがっている。

「お前達の怒りはよくわかる。でも、こいつのせいで死んだ人間はそう多くない」

目の前の女が少し振り返り、祈李にもその顔が見えた。

さつき、祈李の目の前で影を殺した拳銃使いだった。

「確かに、結界のせいで神社に入れない人は大勢いただろうさ。でも、お前達は結局無事に入れたじゃないか。あの化け物には殺されなかった。違うか？」

誰かが、でも私の子供は死んだわとヒステリックな声をあげた。

「あんたの子供は…… かわいそうだった。あたしの目の前で、あの化け物に殺されたよ。でも、それとこの女とはなんの関係もない。ただ逃げ遅れたただけだ。なぜあんたが、この女を責める？」

反論された女が、なにか叫んだ。たぶん意味のない言葉。反論は続く。

「いいか、もう一度言う。この女のせいでここに入れず、それで死んだ人間はそう多くない。死人の多くは、結界とは無関係に死んだ。お前達の気持もわかるが、だからといってこの女を責めるのは理不尽だ」

それっきり、誰も何も言わなくなった。言えないのか。

祈李はといえば、そろそろ限界が近かった。誰かは知らないがかはってくれるのはうれしい。でも、それで罪の意識が消えるわけではない。

涙があふれてきた。だめだ。もうやだ。放っておいてほしい。関わらないで。

気がつけば、体が勝手に動いていた。ただひとり、そこから走って逃げ出していた。

「あ……」

祈李という名前の少女が駆けだしたのを見て、隣にいた巫女さんはすぐに追いかけようとした。

「待ちな」

しかし、祈李をかばっていた女が制止した。

「あたしが行く。あんたは自分の仕事をしな」

「……………」

一番の当事者がいなくなつて茫然としている島の住民を見る。たしかに。彼らはここを頼つてきたのだ。

「じゃあ、お任せします、辻風さん」

「おう。任せろ」

いつも通り頼りになる人だこと。しばしば女傑と呼ばれているが、ぴったりだ。

いや、今は自分の仕事をしなければ。巫女さんは頭を振り、これからすべきことについて考えた。

どこか、どこか人のいない場所へ。涙でぼやけた視界の中を、祈李は必死で走った。ここはどこ？ 回りは緑一色。森の中？ 人の気配はない。でも走りをやめる気にはなれなくて。でも、もともと体力がある方ではない。

「あつ」

石につまずいて盛大にこけてしまった。途端に疲れがどつと襲いかかる。立ちあがる気力もない。

もうやだ。なにもしたくない。なんでこんなことになったんだろう？ やだ。やだ。このまま消えてしまいたい。

「おい、大丈夫か」

頭上から声が聞こえた。さっき祈李をかばってくれた声。どうしてこの人は、ここまでして構ってくるの？

「なあ、返事してくれ。立てるか？」

顔を上げると、彼女は優しく笑い、手を差し伸べていた。

「な？ 悲しいのはわかるが、でも泣いてるだけじゃなにも変わらないぞ。ほら立って」

その優しさに、今度こそ耐えられなくなった。少しだけであつて

もこらえていた涙が決壊し、目からあふれ、声をあげて泣いた。優しい女性は、その様子をただ黙って見守った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727q/>

使い捨ての英雄

2011年11月14日03時33分発行